

彙報

一九八八年二月より
一九八八年二月まで

研究状況

班研究

東 方 部

古史新證

班長 林 巳奈夫
前年にひきつづき、中國新石器時代から秦漢時代までの、出土資料に關する諸問題について、班員の研究發表を、隔週でおこなっている。前回の「中國文明の諸源流」班をふくめて、當班で發表されたものうち、いくつかを、『古史春秋』第五號として公刊の豫定。

中國近世の法制と社會

班長 梅原 郁

唐律おいての一つのピークに達した中國の法制は、所謂「律令制度」との關わりの面から、従来より日本でも多くの研究者の關心を引きつけてきた。また、元代の法制に關しては、『元典章』『通制條格』などを通して本研究所でも優れた研究成果をあげてきた。しかし、その中間にあり、しかも中國法制史における注目すべきエポックでもある宋代の法制については、これまで必ずしも十分に究明されてきたとは言いがたい。本共同研究では、南宋の『慶元條法事類』と、最近その存在を知られるようになった明板『名公書判清明集』の會讀を通じて、律令時代から敕令時代への移行、地方

末端での敕令の具體的運用等の問題を、様々な視角から考究する。現在、毎週『條法事類』と『清明集』とを交互に讀みながら、問題點を檢討しつつ、現代語譯と詳注を作成している。本年は前者を卷九・職制門六まで、後者を卷三・文事門まで讀了した。

中國科學史文獻研究

班長 山田 慶兒

一九八七年度から「中國科學史文獻研究」班を組織し、三か年の豫定で、これまであまり取り上げてこなかった諸種の文獻の檢討を進めている。とりあげる文獻は大きく二つに分かれる。一つは最近出土した科學文獻のうち、『新發現中國科學史資料の研究・譯注篇』を公刊した時點以後に公表されたもの。これはすでに譯注の作成を終えており、前掲書の補遺として、『東方學報』に掲載する豫定である。一つは、『東方學報』に掲載するにもむしろ、中國科學の方法・思想・組織、あるいは外國の知識の受容過程などがよくわかる、科學のすべての分野にわたる文獻。これまでに數學、天文學、本草、建築などの文獻數種を讀みすすんできた。會讀にとりあげた文獻は譯注を作つて編集・出版し、また別に研究論文も順次『東方學報』に發表してゆきたいと考えている。なお、『開元占經』についても、とりあえず引用書目索引を作成する豫定である。

この期間中におこなわれた研究報告は左記の通りである。

二月 九日 三統曆と劉歆の世界觀 川原 秀城

四月二六日 華佗について 山田 慶兒

五月三十一日 日本繪畫史における寫實の問題 佐々木丞平

七月二二日 『黃帝內經太素』の醫學思想 村上 嘉實

九月二〇日 張衡『渾儀注』『渾儀圖注』について 新井 晉司

本草の起源 山田 慶兒

九月二七日 明末方氏學派の成立およびその主張 馮 錦榮

一〇月 四日 中國の無限小解析 川原 秀城

『齊民要術』における五穀と五木 小林 清市

一〇月二一日 緯書曆法考 武田 時昌

『黃帝內經明堂』に關する知見 櫻井 謙介

一〇月二八日 大衍曆の惑星計算法 宮島 一彦

唐代における石鍾乳服用の流行について 坂出 祥伸

一〇月二五日 『墨子』城守諸篇の築城工程 田中 淡

一〇月二二日 『醫心方』半井家本の一考察 杉立 義一

一〇月 一日 『黃帝內經太素』の中の經穴について 高島 文一

一〇月 八日 釜石再精統について 三宅 宏司

崇禎改曆における望遠鏡の位置 橋本 敬造

New Trend in Research of Chinese Ancient Astronomy

徐 振翰

一月二日 望氣術とさまざまな豫知 坂出 祥伸

中國數學史の分期について 川原 秀城

一月二十九日 漢代における思想と科學 武田 時昌

二月一三日 渾天壹統星象全圖について 宮島 一彦

文人の生活 班長 荒井 健

一九八六年度より向う五年の豫定で、舊中國の文人の生活全般について、「江南文人の研究」班の成果をふまえ、精神的・物質的の両面から総合的な検討を行ってみようという目的で、本研究班を發足させる。舊江南文人班よりは一層廣範・包括的なテーマをあえて掲げたのは、班員おののの關心のありようからして、研究対象をむしろ限定しないほうをよしと考えたのである。研究の進めかたとしては、舊班と同じく、下記のとおり各分野の報告と並行して、一七世紀・明末の代表的な文人趣味文獻たる文震亨「長物志」の會讀を続ける。今期は卷五・七・一二を讀了した。

二月 五日 藏書の話 井上 進

五月二七日 叡山文庫にて觀書 田中 淡

六月一七日 晉東南の寺廟(スライド使用) 田中 淡

八月二六日 京博所藏明清文人書畫賞玩 田中 淡

一月二日 曾布川寛氏に聞く「中國の文物新見見」(スライド使用) 班長 尾崎雄二郎

目録學の諸問題 今年度、「目録學の諸問題」班の目録班(A班)では、前年度に引續き黃丕烈「士禮居藏書題跋記」の會讀を進めた。一方、小學班(B班)は、語學をテーマとする

各班員の研究報告を行なった。

國民革命の研究 班長 狹間 直樹

一九八三年に開始した本研究班も、今年度をもって終了した。この研究班を運営することによって得られた研究成果についてはおって發表する豫定であるが、なお殘された問題については、次の

「一九二〇年代の中國」研究班での課題としたい。

一月二二日 清末民初における刑法改正をめぐる論争 小野 和子

一月二十九日 辛亥革命前後(一九〇三—一九一三)の中國婦人組織 馬 燕

二月 五日 蔡元培研究 石田 米子

二月二二日 一九二〇—三〇年代における鄉村教育運動 新保 敦子

一九二〇年代の中國 班長 狹間 直樹

本研究班は、いわば「國民革命の研究」班の「裏」として、同研究班の成果をふまえながら、

對象とする時期をしばり、かつ「二〇年代」という新しい視角から研究をすすめようとするものである。各班員が、政治・經濟・社會・思想・文化

史などの諸テーマにつき研究をおこなっていくことは以前と同様である。なお、五月二七日の牛大

勇氏(北京大學歴史系講師)と十一月一日の段雲章氏(中山大學歴史系教授)は、それぞれ、本

研究所來訪の機會に研究報告をお願いしたものである。また一〇月二八日の會にも関斗基氏(ソウル大學歴史學部教授)に出席していただいた。

四月二二日 「一九二〇年代の中國」研究班を始めるに當たって 狹間 直樹

五月 六日 民族工業にとつての一九二〇年代 森 時彦

五月一三日 五四運動と上海勞働者

五月二〇日 五四運動の組織論 江田 憲治

五月二七日 一九二六—一九二七年廣州・武漢政府的な外交政策 牛 大勇

六月 三日 清末の中國人の日本留學について クリーゲスホルテ

六月一〇日 中國共產黨と吳佩孚 松尾 洋二

六月一七日 湖南五四運動再論 清水 稔

六月二四日 「神泉雜誌」とその作家—穆儒丐について 村田 裕子

七月 一日 陝甘寧邊區の工業合作運動 菊池 一隆

九月三〇日 一九二〇年代中國の青年像 中島 勝住

一〇月一四日 劉師培『天義』・『衡報』 内藤 明子

一〇月二二日 茅盾初期小説における性愛 三枝 茂人

一〇月二八日 関斗基編『國民革命指導者の思想と行動』紹介 森 悦子

十一月 四日 廣東の農民運動と械闘 蒲 豊彦

十一月一日 孫中山與陳炯明的合與離 段 雲章

十一月二八日 清末實業新政の效果について 林原 文子

十一月二五日 「毛澤東の思想」とその現在 北村 稔

十二月 二日 いわゆる「田中上奏文」をめぐる 古屋 哲夫

十二月 九日 現代中國と信教の自由 土屋 英雄

六朝道敎の研究 班長 吉川 忠夫

發足より三年めをむかえた本研究班は、梁の陶弘景によって編纂された『眞誥』七篇全二〇卷中、第一卷から第五卷までと第一九・二〇卷との譯注をおおている。六朝道教の實相究明を目的として、今後また所の内外二〇名ほどの班員との會讀をつづけながら、研究發表もまじえてゆく豫定である。

中國中世の文物

班長 磯波 護

本研究班では昨年に引きつづき、隔週水曜日の研究會で、秦漢から五代に至る時代の出土文物に關する班員の研究發表が行なわれた。八八年の發表題目は以下のとおり。

一月二〇日 百萬塔陀羅尼

勝村 哲也

二月 三日 北齊・隋の石窟寺院

曾布川 寛

二月 二七日 唐代太原城の規模と構造

愛宕 元

四月 二七日 禹歩と步綱

麥谷 邦夫

五月 一八日 居延漢簡に見ゆる物資の輸送について

佐原 康夫

六月 一日 唐代後期の地方財政——州財政を中心にして

渡邊信一郎

六月 一五日 王杖十簡と王杖詔書冊

富谷 至

六月 二九日 吐魯番出土の隨葬衣物疏

淺見直一郎

九月 二二日 新唐書と史料

中砂 明德

一〇月 五日 北京留學記

長部 悦弘

一〇月 一九日 唐の玄宗御注三種

吉川 忠夫

十一月 一六日 漢代畫像石について

角谷 常子

十二月 七日 西晉の墓誌

福原 啓朗

四—八世紀の中央アジアとインド

班長 柴山 正進

一九八六年四月より五年計畫で開始した研究班

の目標（東方學報第五十九冊、六〇四頁参照）のうち、『往五天竺國傳』の現代語譯と注釋との作成は、八八年一月より一二月までの期間に、鳥長國より最後の安西までの記事を終了した。擔當者は、小野浩・井谷綱造・森安孝夫・稻葉稜・杉山正明・柴山正進で、現代語譯及び語注と、内容注とを各人が擔當することによって、兩者の精度を増すことにつとめた。テキストは、ベリオ・羽田共編『敦煌遺書』上冊分に基づき、羽田亨「慧超往五天竺國傳彙錄」・W. Fuchs, Huehlsso's Pilgerreise durch Nordwest-Indien und Zentral-Asien um 726を参照している。なお五月一六日にはパキスタン考古局北部擔當部長 M. R. Mughal 博士のパキスタン考古學の現況に關する報告、五月三〇日にはエルミタージュ博物館中央アジア課長 B. Marshak 教授のピアンジケント發掘報告、並びに國立東洋美術館古代美術部長 A. M. Leskov 教授のスキタイ墳墓の發掘報告があった。

日本部

近代日本の政治運動

班長 古屋 哲夫

この研究班は尊王攘夷運動から昭和初期の社會運動まで、近代日本の諸種の政治運動を比較研究することを目的としている。これらの政治運動が生起する條件には、政治體制の集權化、議會の制度化、政黨政治の進展、種々の社會集團の政治化などの政治構造の變化があるが、こうした變動によって生成・展開してくる政治運動を比較・検討する觀點として、運動の組織・綱領の作成、財政基盤、組織指導のあり方等をとりあげ、政治運動に共通する特質をさぐり、同時に近代日本の政治そのものの特徴を追求する。

近代日本のアジア認識

班長 古屋 哲夫

本研究は、近代日本においてアジアという言葉が、どのような情報にもつき、どのような目的のもとに使用されてきたかを、明らかにしようとするものである。そしてそのためには、(1)アジアからの情報が日本にもたらされる道筋と仕組み、(2)日本人のアジアへの要求のあり方と進出の仕方、(3)アジアの觀念を利用した日本人の國民的使命感の創出、などの問題を検討することが必要となる。國民文化の成立：ナシヨナリズムの諸相

班長 飛鳥井雅道

本研究班は八七年度をもって終了した。この年度における各メンバーの發表は、それぞれ報告書を意識したものになった。八八年一二月現在、以下の論考が提出されており、番外の研究會を組織して検討を行う豫定である。

「法隆寺の發見」(井上)

「明治年間に現れた教育勅語再検討論(假題)」(小股)

「公民權・名譽職制・等級選舉制—地域社會編成からみた明治憲法體制—」(奥村)

「反動と流行—明治二〇年代の西鶴復活—」(平田)

一九世紀の文明史的研究

班長 横山 俊夫

人類史において一九世紀とは何であったのか？この問いへの答えを、當時の情報傳播技術と諸文明の態様との連關という視點からさぐってきたが、一九八八年三月を以て、三年に亘る研究活動に終符を打った。現在、報告書「視學の一九世紀(假題)」の編集作業をすすめている。

なお、一九八八年二月からウィーン大學のセツプ・リンハルト教授が客員班員として参加した。

「滿洲國」の研究

班長 山本 有造

本研究會は、日本の植民地支配の主要な一環をなした「滿洲」——中國東北地域について、その最終形態としての「滿洲國」期に焦點をあて、支配の實態を統一的に（政治的・經濟的・文化的諸側面、ならびに日本植民地史のおよび中國地域史的アプローチを合せて）究明しようとする。一年間の準備會のち、一九八七年四月より正式に發足し、現在隔週に研究會を開いている。

關西における關係研究者の数が限られているため、關東方面からゲスト・スピーカーを招くなど報告の幅を広げるよう努力している。

貝原益軒とその時代

班長 横山 俊夫

一七世紀後半から一八世紀初頭にかけての安定期日本社會の性格を考えるため、貝原益軒の著述を學際的な視野から検討している。益軒の知的活動の廣さと讀者層の多様さが、その著述に獨特の社會性を與えていたと考えられるからである。

初年度の活動として、『大疑錄』『大和本草』

『君子訓』『京城勝覽』の精讀を試みた。日本、東方、西洋各部にまたがる班員構成に加え、本年はウィーン大學からセップ・リンハルト教授、慶北大學から宋集七副教授を客員に迎えた。

明治維新期の研究

班長 佐々木 克

現在の日本近代史研究の動向は、かつて明治維新を、絶対主義天皇政權の誕生とみなしていた見解から、論者によってはさまざまな註釋つきながらも、それはブルジョア革命であった、とする理解が主な潮流となっている。こうした變化をもたらした要因の一つは、急速に展開した地方自治體史の編さんにもなる史資料の發掘であり、また公・私文書の大量の公開・刊行という新たな状況によるものである。しかしながら、明治維新についての發言は、ほぼ近代史の研究者に限られ、

また新史料も必ずしも十分に消化・吸收されているとはいえない。そこで當研究班では、近世史研究者の協力を得て、新しい史料を把握した上で、研究史を再検討し、明治維新を化政期から憲法體制成立期（およそ一九世紀全體）に至る長い時空の中で考え、かつ政治のみならず、思想・文化・經濟・社會等々さまざまな分野からのアプローチを試み、しかも變革の面と繼承の面と雙方に留意しつつ個別研究を積重ね、最終的には、明治維新とはいかなるものであったか、ということを明確にすることを目標としている。

西洋部

諸宗教の比較論的研究

班長 山下 正男

本研究は、キリスト教、イスラム教、佛教、ヒンズー教、道教、神道、各種民間宗教を研究對象とする。研究方法は文獻學的方法とフィールド・ワークの方法を併用する。

班員は前掲の諸宗教のうちの一つまたは二つの専門家であって、各人は研究會の場で、自己の分野の専門的知識を提供するとともに、他の分野の専門家と共同して比較研究に努める。その場合、各宗教のもつ重層性に留意する。重層性とは、神學レベル、儀禮レベル、民俗學的レベルからなる重層性を意味する。そして比較に際してはこの三つのレベルの混同を避けるように努める。

本研究の最終目標は、諸宗教の比較によって、宗教一般の歸納法的定義を見出すことにある。

國家の比較史的研究

班長 中村賢二郎

本研究では前近代社會における國家の諸機能の分析をおこなっている。ヨーロッパ中・近世を主考察對象とはしているが、同時に、ヨーロッパ近

代、日本、中國、西アジアとの對比作業もおこなわれた。本年度は研究の最終年度にあたるため、同時代人の國家・王權觀、國民・民族意識の成立、國家の統治（主として行政・財政）機構などに研究關心が集まった。共同研究報告も年度内に公刊される。

民族誌記述の方法をめぐる 班長 谷 泰

初年度（八六年）は、民族誌記述の方法、それを行なう際の前提作業としてのフィールドにおける意味の讀みとりに係わる最近の方法論上の議論や主張を批判的に紹介することに焦點をおいた。

八八年度は、八七年度にひきつづき、個々の班員のフィールドおよび關心對象に應じて、具體的な民族誌的ケース・スタディの發表がなされた。報告者に應じて、志向する記述の對象が異なりはしたものの、方法論についての共通の問題點がいくつか確認され、その上になつて方法の類型化がすすめられつつある。

知識と秩序 —— 近代におけるその再編過程 ——

班長 阪上 孝

フランス革命をはさんで一八世紀半から一八三〇年頃にいたる時期は、政治・經濟の領域のみならず知識の領域においても大きな革新が進行した。しかも、知識と社會の關係が大きく變化した時代である。社會秩序は神によって與えられたものではなく人間が作るものだという新たな前提のもとで、秩序の建設のための知識の形成、その知識の制度化・社會化が重要な課題となり、またそれにもなつて社會における知識人集團の問題が現れてくるのである。本研究は、この時期の知識と秩序の關係を多角的に検討することによって、近代社會の問題性をその原點において把握し、同時に、近く二百周年を迎えるフランス革命について、從

来とはちがった角度から光を當てることを目的とするものである。目下、各分野の研究成果を持ち寄り、共通の枠組を作る作業を進めている。

フランス・ロマン主義の研究 班長 宇佐美 齊
前年にひきつづき、フランス・ロマン主義の多角的な分析とその総合をめざして、各班員の口頭発表、討論を中心に研究会をつかみかさねた。活動開始後二年目にあたる四月以降は、フランス・ロマン主義が提起した諸問題のうち、特に重要と思われるいくつかのテーマに少しづつ収斂するような形で、研究報告がなされた。視野の廣さと同様に、切り込みの鋭さが要求される対象であるので、今後の方針としては、問題意識の「擴散と集中」という点において、班員間に一定の合意がなされて来ている。なお四月はじめに数名の新しい班員の補充が行われ、研究體制がいっそう強化された。

傳統文化の構造——古代インドとインド・ヨーロッパ諸民族の文化比較—— 班長 井狩 彌介
第二年目に入った本研究班では、前年に引續き、北西インドのカシミール地域で作られたサンスクリット文獻「ニラマタ」の會讀を進めつつ、七世紀頃のこの地においてヒンドゥーイズムの傳統文化がどのように編成されていたかの問題を、儀禮、曆法、神話、聖地傳承などを手がかりにして検討を進めている。これまでにテキスト全體の約三分の二について検討を終えているが、従來の刊本の検討を通じてテキスト確立のための諸寫本の再検討の作業が本年度後半から加わっている。これまでの部分の検討において、本テキストの構成と内容についての興味深い様々の新たな見解が得られている。

班員 井狩彌介、山下正男(以上所内) 狩野

恭、徳永宗雄、御牧克己(以上文學部) 赤松明彦(九州大) 永ノ尾信悟(國立民族學博物館) 榎本文雄(華頂女子短大) 黒田泰司、八木徹(以上大阪學院短大) 鳥岩 引田弘道(以上愛知學院大) 正信公章、渡瀬信之(以上東海大) 竹中智泰(常葉學園大) 中谷英明(神戸學院大) 林隆夫(同志社大) 藤井正人(大阪大) 矢野道雄、山上證道(以上京都産業大) 明清時代の國家と社會 班長 谷口規矩雄

本研究班は一九八七年度を以て發足以來三年間にわたる研究活動を終了。この間、班員各位の研究課題はその自主的選択に委ねられていたが、ただ全體として一層のまとまりをもつべく、研究對象の時期をなるべく明末清初期に絞るよう要請していた。八八年度末に出版される『明末清初期の研究』は、これに應えて提出された班員四名の論文からなるもので、本研究班の研究成果であるとともに、その様な成果を生み出した班員各位の惜しめない協力を記念するものでもある。

漢代出土文字資料の研究 班長 永田 英正
漢代の簡牘、帛書、石刻の類は、後世になって整理編集され、印刷された文獻とは異なり、同時代史料として漢代史研究には欠かせない貴重な資料である。しかも近年では、これらの資料は中國の各地において相次いで發見され、その数は著しく増加してきた。本研究はこれらの資料を蒐集整理して可能なかぎり正確な釋讀を行い、併せてこれらの資料を漢代史研究史料として有効に利用するために如何なる研究方法をとるべきかを従來の諸研究をふまえて検討し、漢代史研究に新しい研究領域を開くことを目的として計畫された。

初年度にあたる本年は、先ずスタインの第二次探險で發見した敦煌漢簡を取り上げ、かつて居延

漢簡で採用したと同じ方法で寫真カード化を進めるとともに、四月から九月までは『疏勒河流域出土漢簡』をテキストに永田英正、富谷至、佐原康夫、角谷常子、藤田高夫、大川俊隆、吉本道雅が擔當して敦煌漢簡の釋文の校訂と研究を行なった。また石刻類に關しては本研究所の豊富な拓本資料と寫真カードを基礎にして、これも四月以來新資料を寫真カードで追加する作業を進めてきたが、敦煌漢簡の主要な部分が一段落した一〇月以降は石刻の研究に移行し、注釋の作成を進めている。

一〇月一四日 鮮于璜碑 富谷 至
一〇月二八日 魯峻碑・三老趙寬碑 永田 英正
十一月一日 開通褒斜道摩崖・石門頌 末次 信行

十一月二五日 禮器碑・校官碑 稻葉 一郎
十二月 九日 裴岑紀功碑・楊震碑 渡邊信一郎

個人研究

東 方 部

中國音韻史の研究 尾崎雄二郎
殷周文物の考古學的研究 林 已奈夫
中國の詩學 荒井 健
中國古代の醫學と思想 山田 慶兒
宋代の官僚制度 梅原 郁
六朝隋唐精神史 吉川 忠夫
隋唐社會史研究 礪波 護
五四時期における中國社會主義の研究 狹間 直樹
プレヒイスラム期中央アジアの考古學 栗山 正進

中國中世土地所有の研究 勝村 哲也

- 六朝道教思想研究
- 古代中國における説話傳承の研究
- 中國美術の造形と意味
- 中國建築の様式・技法・空間
- 近代中國綿紡織業
- 東北作家の文學
- 明清學術史の研究
- 一九二〇年代における中國勞働運動
- 明清初士大夫思想研究
- 中國古代都市論
- 漢唐間における天文學と文化
- 中國近代教育史の研究
- 中國の中世・近世繪畫
- イスラム勢力進出期のアフガニス
タン・北インド
- 佛敎論理學(因明)史研究
- 中國中世の政治と社會
- 日本部
- 日本近代文化史の研究
- 日本ファシズムの研究
- 植民地經濟の研究
- 廢藩置縣の研究
- 文化史および文明史としての國民國家の形成
- 日本近世社會における政治權力
- 政治文化の中の社會理論
- 日本帝國主義の經濟構造
- 日本近代文學の研究
- 近代日本形成期における地域構造
- 西洋部
- ドイツ宗教改革史
- 西洋論理思想史
- 社會的相互行為の解讀

- 麥谷 邦夫
- 小南 一郎
- 曾布川 寛
- 田中 淡
- 森 時彦
- 村田 裕子
- 井上 進
- 江田 憲治
- 三浦 秀一
- 佐原 康夫
- 新井 晋司
- 小林 敦子
- 河野 道房
- 稻葉 稷
- 船山 徹
- 辻 正博
- 飛鳥井雅道
- 古屋 哲夫
- 山本 有造
- 佐々木 克
- 横山 俊夫
- 藤井 讓治
- 山室 信一
- 杉本 俊宏
- 平田 由美
- 奥村 弘
- 中村賢二郎
- 山下 正男
- 谷 泰

- 近代社會の家族
- フランス散文詩の研究
- シュメール行政・經濟文書の研究
- インド世界の儀禮の研究
- 群衆現象の社會學
- スリランカにおける宗教と社會
- ヨーロッパ一二世紀の論理學と意味論
- 社會構造の概念に関する社會哲學的考察
- 西洋中世政治思想史
- デカダンス研究
- 東方部研究會
- 東方學報五九冊書評
- 一月一三日 林論文評
- 淺原論文評
- 一月二七日 竹内論文評
- 井波論文評
- 二月三日 「漢代の官衙と屬吏について」
- 二月一七日 「壺型の宇宙」
- 「中國古代の遺物に表はされた
『氣』の圖像的表現」
- 「漢學の成立」
- 東方學報六〇冊書評
- 一月二日 林論文評
- 山田論文評
- 一月一六日 小南論文評
- 梅原論文評
- 一月三〇日 曾布川論文評
- 三浦論文評
- 一月二七日 「曆法の發達と政治過程」
- 阪上 孝
- 宇佐美 齊
- 前川 和也
- 井狩 彌介
- 富永 茂樹
- 田中 雅一
- 岩熊 幸男
- 淺田 彰
- 甚野 尙志
- 鈴木 啓司
- 河野 道房
- 勝村 哲也
- 小林 敦子
- 梅原 郁
- 佐原 康夫
- 小南 一郎
- 林 巳奈夫
- 井上 進
- 麥谷 邦夫
- 稻葉 稷
- 狹間 直樹
- 田中 淡
- 船山 徹
- 森 時彦

事業概況

- 夏期講座——歴史と現在——
- 一九八八年八月 於 本館大會議室
- 一日 音聲多重テクスト
- 文學における敘述の方法—— 平田 由美
- 歴史と文學の方法
- 司馬遼太郎から安部公房まで—— 佐々木 克
- 二日 陸世儀の心性論
- コットン・ロード 三浦 秀一
- 三日 「ノリ」ということば
- 能樂での用法と現代的用法—— 森 時彦
- 現代に語りつがれるマハーバーラタ 藤田 隆則
- 田中 雅一
- 開所記念公開講演會
- 一九八八年一〇月二七日 於 本館大會議室
- 五四運動と勞働者
- 中國勞働運動史の起點—— 江田 憲治
- 日本近世社會における武家の官位 藤井 讓治
- 二月二日 「唐代社會と金銀」 狹間 直樹
- 「李義山詩集續考」 荒井 健
- 二月一五日 「湖南第一紗廠」 新井 晋司
- 「王遠知傳」 森 時彦
- 「漢代郡縣の財庫について」 吉川 忠夫
- 「宋教仁と傳統學術」 佐原 康夫

ノアの子孫の食卓 — その語りの意味分析 —

谷 泰

停年退官教授講演會

一九八八年三月一七日 午後一時半

於 本館大會議室

一般意志 — 神意から民意へ — 樋口 謹一

ボードレールの詩を読む 茅田道太郎

一九八八年度漢籍擔當職員講習會

「漢籍電算處理」は、本學大型計算機センターの協力を得て一〇月三日より同月七日まで次の通り行なわれた。

三日 漢字文獻處理の諸問題 (講演)

大型計算機センター教授 星野 聰

東洋學文獻類目の編集とフォーマット 都築 澄子 (講義)

データベースについて (講義)

大型計算機センター助手 萩野 達也

計算機處理入門 (講義)

大型計算機センター技官 隈元 榮子

四日 A L A 文字と東南アジア言語處理 (講義)

大阪國際大學助教授 柴山 守

東洋學文獻類目の計算機處理 (講義)

大型計算機センター技官 河野 典

學術情報ネットワーク (講義)

大型計算機センター技官 櫻井 恆正

データベース檢索(1) (實習)

データベース檢索(2) (實習)

五日 計算機入門 (講義)

大型計算機センター助教授 島崎 眞昭

漢字コードの話 (講義)

大型計算機センター技官 小澤 義明

データベース檢索(2) (實習)

六日 エキスパートシステムと情報檢索 (講義)

大型計算機センター助手 大西 淳

學内ネットワーク (講義)

大型計算機センター助教授 金澤 正憲

データベース檢索(3) (實習)

七日 附屬圖書館見學

大型計算機センター見學

東洋學文獻類目と漢籍目錄の電算化 (講義)

勝村 哲也

一九八八年度漢籍擔當職員講習會

「初級」は、一二月七日から同月一二日まで、次の通り行なわれた。

七日 漢籍 (講義) 梅原 郁

四部分類 (講義)

滋賀大學助教授 井波 陵一

八日 目錄法(1) (講義)

田中 久子

九日 四角號碼と三角編號法 (講義)

森賀 一恵

實習

一〇日 地志 (講義) 井上 進

實習

一一日 新學書 (講義) 森 時彦

實習

一二日 質疑應答

所員 動 靜

樋口謹一、茅田道太郎 (西洋部) 兩教授は、停年退官 (三月三十一日付)、京都大學名譽教授の稱號を授與 (四月一日付)。

永田英正滋賀大學教育學部教授は、併任教授 (東方部)。(比較文化研究部門、四月一日) 一九八九年三月三十一日

。谷山正道廣島大學文學部助教授は、併任助教授 (日本部)。(比較文化研究部門、四月一日) 一九八九年三月三十一日

。林 武實助手 (東方部) は、辭任 (三月三十一日) の上、名古屋外國語大學講師に轉出。

。細川弘明助手 (西洋部) は、東京外國語大學外國語學部講師に昇任 (四月一日付)

。鈴木祥二助手 (日本部) は、辭任 (三月三十一日) の上、立命館大學文學部助教授に轉出。

。淺原達郎助手 (東方部) は、辭任 (三月三十一日) の上、神戸商科大學 (人文科學科擔當) 助教授に轉出。

。杉山正明助手 (東方部) は、辭任 (三月三十一日) の上、京都女子大學講師に轉出。

。森 時彦愛知大學法經學部助教授は、當研究所助教授 (東方部) に採用。

。阪上 孝助教授 (西洋部) は、教授に昇任。

。藤田隆則氏を助手 (西洋部) に採用 (以上四月一日付)

。小南一郎助教授 (東方部) は、教授に昇任 (五月一日付)

。田中雅一國立民族學博物館第二研究部助手は當研究所助教授に昇任 (六月一日付)

。船山 徹・稻葉 稜兩氏を助手 (東方部) に採用 (八月一日付)。

。辻 正博氏を助手 (東方部) に採用 (一〇月一日付)。

。佐々木 克助教授 (日本部) は教授に昇任 (十一月一日付)

。淺田 彰助手 (西洋部) は、一月二日伊丹發、パリに於いて「ヨーロッパの文化的アイデンティティ」に關する國際會議に出席し、社會構造の概念に關する社會哲學的考察についての資料

収集を終え、同月一八日歸國。

。横山俊夫助教(日本部)は、一月二〇日伊丹發、ソウル大學、慶北大學等で韓國の高等教育・研究機關における學術交流の實情調査を終え、同月二七日歸國。

。横山俊夫助教(日本部)は、二月二八日伊丹發、タイ國のタマサート大學日本研究センター、チェンマイ大學歴史學部等でタイにおける日本研究の現況調査を終え、三月一五日歸國。

。小林敦子助手(東方面部)は、二月二九日伊丹發、華僑大學、華北師範大學等に於いて華僑教育の現況調査を終え、三月一五日歸國。

。淺田彰助手(西洋部)は、三月三日伊丹發、コロンビア大學で近代日本文學に關するセミナーに出席し、三月一六日歸國。

。田中淡助教授(東方面部)は、三月八日伊丹發、南京工學院建築研究所、五臺山、永樂宮等で古建築調査を終え、同月三一日歸國。

。岩熊幸男助手(西洋部)は、五月二二日伊丹發、ドイツ連邦共和國のフライブルグ大學で第八回中世論理學ヨーロッパシンポジウムに出席し、同月二九日歸國。

。甚野尚志助手(西洋部)は、ドイツ學術交流會の招請により、六月五日伊丹發、ゲーテ・インスティテュート、マックス・プランク歴史研究所、ケンブリッジ大學等で、ヨーロッパ中世社會史研究及び資料収集し、一九八九年九月三〇日に歸國豫定。

。林 巳奈夫教授(東方面部)は、六月一一日伊丹發、ニューヨークのチャイナインスティテュートで中國古玉器に關する研究資料収集し、同月二六日歸國。

。宇佐美 齊助教授(西洋部)は、文部省在外研

究員として、六月二七日伊丹發、パリ第七大學でフランス近代詩に關する研究調査、ルーヴラン大學、ロンドン大學で、同資料収集を終え、一〇月八日歸國。

。谷 泰教授(西洋部)は、六月二七日成田發、ブリティッシュミュージアム、イタリヤのアブルツォ市内及び周邊地域で會話的社交に關する研究調査、ユーゴスラビヤのザグレブ國際學會で國際人類學民族學會に出席し、八月二五日歸國。

。山本有造教授(日本部)は七月一三日伊丹發、延吉市で東北地區中日關係史研究會に出席、吉林市において東北經濟史學術討論會に出席し、八月一日歸國。

。田中淡助教授(東方面部)は、七月一八日伊丹發、中華人民共和國山東省威海市の赤山法法院遺跡で考古學的調査を終え、同月二五日歸國。

。前川和也助教授(西洋部)は、七月三一日伊丹發、大英博物館でシュメール楔形文字文書の研究を終え、八月一九日歸國。

。田中淡助教授(東方面部)は、八月三日成田發、カリフォルニア大學サンディエゴ校で第五回中國科學史國際會議に出席し、メトロポリタン美術館等で資料収集を終え、同月一八日歸國。

。井狩彌介助教授(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、八月八日伊丹發、インド國立公文書館でヒンドゥー文獻調査、カシミール大學でナーガ信仰調査、ジャナム大學でヒンドゥー儀禮調査を終え、九月七日歸國。

。横山俊夫助教(日本部)は、九月六日伊丹發、ダラム大學でヨーロッパ日本研協會總會に出席し、大英圖書館、オックスフォード大學等で資料調査を終え、同月二九日歸國。

。佐原康夫助手(東方面部)は、九月二三日伊丹發、徐州師範大學で中國秦漢史研究會に出席し、西北大學歴史系で資料収集を終え、一〇月一二日歸國。

。曾布川 寬助教授(東方面部)は、一〇月一四日伊丹發、北京大學で中國畫討論會に出席し、南京藝術院南京博物院、陝西省考古研究所等で、中國美術資料収集を終え、十一月一八日歸國。

。田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科學研究費補助金にて、十一月二八日伊丹發、カルカッタ大學、デリー大學、マドライ大學で僧院におけるヒンドゥー儀禮調査をし、タミルナード古文書館、ネルー大學で僧院に關する文獻收集調査を終え、一九八九年二月一六日歸國。

。井狩彌介助教授(西洋部)は、文部省在外研究員として、十二月一日伊丹發、ハーバード大學でヴェーダ儀禮とその世界觀の研究、カリフォルニア大學バークレー校、ヘルシンキ大學、インドのプネー大學でヴェーダ文獻寫本資料収集をし、一九八九年八月三一日歸國豫定。

。桑原武夫名譽教授(八三才)は四月一〇日逝去。

。岩村 忍名譽教授(八二才)は六月一日逝去。

。外國人研究員(日本學客員部門)
Semp Linhart ウェーン大學教授
近代日本の都市住民の餘暇行動
受入教官 横山助教授
期間 二月一日〜九月三〇日

。外國人研究員(比較社會客員部門)
何 忠禮 杭州大學歴史系助教授
宋代の政治と社會の研究

受入教官 梅原 教授
期間 二月一六日〜八月一五日

。本學招聘外國人學者受入れ要項により、本研究
所において共同研究に参加する外國人學者は次
のとおりである。

夏 剛 中國社會科學院外國文學研究所助理研
究員

日本の戦後文學と文革後の中國文學の比較
研究 受入教官 荒井教授

期 間 六月三〇日〜一九八九年六月二九日
Bardwell L. Smith カートンカレッジ教授
水子供養の實態調査および歴史研究
受入教官 横山助教授

期 間 七月一五日〜一月三〇日
馬 安 東 杭州大學(日本語)助教授
日本近代思想史の研究
受入教官 佐々木教授

宋 彙 七 慶北大學教師範大學倫理教育科副
教授
一七・一八世紀の日韓思想史の比較研究
受入教官 横山助教授

期 間 四月一日〜七月一〇日
廖 育 群 中國科學院自然科學史研究所助理
研究員
日本における中國醫學及び中國醫學史研究の
歴史と現狀 受入教官 山田教授

期 間 二月六日〜一九八九年二月五日

外國人共同研究者

Fabrizio Pregadio イタリアア東方學研究員

日中の宗教と醫學史 受入教官 山田教授

期 間 一〇月一日〜二月三十一日

。本學研修員規程により、本研究所において研修
する外國人研修員とその題目は次のとおりであ
る。

Messhi Evelyn パリ第七大學院生

五代四川佛敎と道敎繪畫 指導教官 荒井教授

期 間 四月一日〜一九八九年三月三十一日
Daniel Marier トント大學院生

中國女性史の研究 指導教官 磯波教授
期 間 四月一日〜一九八九年三月三十一日
Françoise Bottéro パリ第七大學院生

中國先秦文學の研究 指導教官 尾崎教授
期 間 四月一日〜一九八九年三月三十一日
John A. Tucker ハンビア大學院生

荻生徂徠の「辯名」：翻譯と分析
期 間 九月一日〜一九八九年七月三十一日
Marguerite Wells オックスフォード大學院生

新劇における笑い 指導教官 横山助教授
期 間 九月二四日〜一〇月二三日
Richard Piorunski フランス國立東洋言語文明
研究所博士課程

新情報システムの社會受容にかかわる社會
文化的背景 指導教官 谷 教授
期 間 一〇月一日〜一九八九年三月三〇日
Sykle U. Scherrmann ハイデルベルグ大學院
生

淮水流域の文化發展と春秋時代の諸地域文化
相互の交流關係 指導教官 林 教授
期 間 一〇月一日〜一九八九年三月三〇日
Eric Laurent パリ第七大學院生

日本における民族動物學
指導教官 谷 泰

期 間 一〇月六日〜一九八九年九月三〇日

出版 物

紀 要

東方學報 第六〇冊(紀要第一〇六冊)
一九八八年三月三十一日刊

人文學報 第六三冊(紀要第一〇七冊)
一九八八年三月三十一日刊

ZINBUN (歐文紀要) 第二三號
一九八八年三月三十一日刊

研究報告その他
東洋學文獻類目 一九八五年度 附屬東洋學文獻
センター編
一九八八年二月二九日刊

東洋學文獻類目 一九八六年度 附屬東洋學文獻
センター編
一九八八年二月二八日刊

漢語史の諸問題 尾崎雄二郎編
一九八八年三月三十一日刊

轉形期の中國 竹内 實編
「禪の文化」資料編「禪林僧寶傳」譯注
第一冊 柳田聖山編
一九八八年三月三十一日刊

所報「人文」第三四號
一九八八年三月三十一日刊